

「愛は神から出る」井上隆晶牧師

ヨハネの手紙一 4 章 7～15 節、ヨハネの福音書 3 章 16～21 節

①【神は愛である】

「愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。…神は愛だからです。」（I ヨハネ 4：7～8）

「神は愛だからです」という聖句は有名な言葉です。16 節にも「神は愛です」と出て来ます。長老ヨハネが初めてこの言葉を使いました。これは本人の体験から出てきた言葉でしょう。「神は愛です」という表現は、神様の本性ではなく、神様の周延的な性質を示すものです。神様はお創りになった人間と関わり、交わろうとする時、私たちが愛と呼んでいるご自分のエネルギーを限りなく注がれます。神の愛は人間の考えうる限りの愛を超えています。神は無限だからです。神の愛を太陽エネルギーに置き換えて考えてみてください。太陽は善人の上にも、悪人の上にも等しくその光と熱を放射します。しかし人間の側ではやれ「今日は暑い」とか「今日はちょうど良い」とか一人一人感じ方が違い、わがまを言います。それと同じように、神の愛はすべての人に同じように注がれるのですが、一人一人感じ方が違うのです。それでも神は愛することをやめません。母親は生まれたばかりの赤ん坊を抱くとき、腕の力を抜いて、そっと優しく抱きかかえます。いくら愛しているからといってぎゅーっと抱くなら、赤ん坊は死んでしまうのでしょうか。それと同じように神はご自分の愛のエネルギーを調節しながら、人間の益になるように伝え続けるのです。

「愛は神から出るもの」と書かれています。これも母親と赤ん坊に例えれば良くわかるでしょう。赤ん坊が生まれる前から、その子を欲しいと願う親の愛があって、赤ん坊はこの世に生まれてきました。親の愛の中に生まれてきたのです。赤ん坊はわがまを言いますが、親は愛で応答します。赤ん坊がお母さんを愛したのではなく、お母さんがまず先に赤ん坊を愛し、愛を注いだのです。そうやって赤ん坊は愛を知ってゆくのです。それと同じで、神の愛のエネルギーが世界が始まる前からまずあって、そのエネルギーの溢れが、この世界と人間を創造しました。なぜ私は生まれてきたのか、その答えは神があなたを愛し、ご自分の愛と豊かさを与えたくてあなたは創造されたのです。

●幼稚園の園長先生が敬老参観で、おじいちゃん、おばあちゃんたちに挨拶でこう言われました。「孫は本当にかわいい、無条件でかわいい、なぜか分からないけれど可愛いんです。だからぎゅーっと抱きしめてあげてください」これは園長先生本人の感想なんです。親になり、歳をとって孫ができると、自分の経験から神の愛が良く分かるようになります。

②【互いに愛し合いなさい】

長老ヨハネは、特にキリストの降誕と十字架の中に神の愛を見ました。彼はこう語ります。「わたしたちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

(Iヨハネ 4:10) イザヤ書で神様はバビロンにいるイスラエルの民のことをこう呼びます。「まこともなく、恵みの業をすることもないのに、主の名をもって誓い、イスラエルの神の名を唱える者よ」(48:1)「私は、私の名のために怒りを抑え、私の栄誉のために耐えて、お前を滅ぼさないようにした。」(48:9) お前は不誠実で、良い行いもしない。私はお前に対する怒りを抑え、お前を滅ぼさないように我慢している。それは私の栄光のためだ、というのです。そんな神に反抗する民に対して神はそれでも「わたしは主、あなたの神である」(48:17) と呼びかけられるのです。これは驚きです。頭が下がります。人間に出来るものではありません。

●この箇所について榎本牧師はこう書いています。「わたしはあなたの神であるというのを神の方から、繰り返し繰り返し言っておられるのである。「わたしはあなたがたの神ではない、あなたがたのことを知らない」と言われても、ひと言も言い返すことのできない、神に背いたイスラエルであったのに、「わたしはあなたの神だ、わたしに帰れ、わたしはあなたの罪をいやす」と、いつも神の方から近づいてこられたのである。お互いの間が気まずくなった時には、どちらかが折れて出ない事には和解しにくいものだが、先に「私が悪かった」とか「仲直りしよう」と声をかけてゆくことはなかなかむづかしい。…そういう意味において神は本当にイスラエルを愛しておられたのだと思う。」

長老ヨハネはここで、悪いのは人間の方なのに、神の方から仲直りしようと人間に近づき、御子キリストを送って下さったのだと言うのです。昔、「愛とは相手のために大損をすることだ」という言葉をどこかで聞いたことがあります。私たちは損をしたくないのです。だから損をするような相手とは関わろうとしないのです。でも神はそうではない。大損をするのに、そんな人と関わろうとする。そして損を損だと思わないのです。愛とはそういうものです。愛するという事は、そんな神の愛を真似ることなのです。だから愛とは好きだということではなくて、その人と関わり、大損をし、自分が貧しくなることなのです。

③【聖霊を宿すこと＝神が私と共におられるしるし】

神が私と共にいてくださることは何によって知ることができるでしょう。病気にならない、仕事がうまくいく、災いから守られる、何をやっても成功する、それらは確かに旧約聖書の中に書かれています。「あなたには災難もふりかかることなく、天幕には疫病も触れることがない。」(詩編 91:10) など。しかし新約聖書になると違ってきます。神を信じていても殉教して短い生涯になることもありますし、試練や苦しみがあります。イエス様ははっきりと「あなたがたには世で苦難がある」(ヨハネ 16:33) と言い、聖パウロも「私たちが神の国に入るには、多

くの苦しみを経なくてはならない。」(使徒 14 : 22) と言っています。神が共にいられても苦しみはあるのですから、自分の周りの状況に神が共にいてくださるしを求めてはなりません。神が私と共にいてくださる最も確かなしとは、あなたが神の聖霊を受けていることなのです。「神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、…神も私たちの内にとどまってくださることが分かります。」(I ヨハネ 4 : 13) 聖書のどこにも聖霊が創られたという記事はありません。むしろ聖霊が万物を創造したと書かれています。聖霊は神だからです。この神が私の中に住むのです。するとどうなるのか。「イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。」(I ヨハネ 4 : 15) 聖霊が内におられる人は、イエス様を信じ、イエス様は神の子であると告白することができるのです。これはパウロも言っていることです。「聖霊によらなければ、だれも、イエスは主であるとは言えないのです。」(I コリント 12 : 3) だから聖霊が去れば告白できなくなるのです。仏教は人間の悟りですが、キリスト教は昨日喜びに満たされていた人が、今日全然喜びが湧かないということがあるのです。それは、信仰というのは私たちの知識とか力で築かれるものではなく、聖霊を受けることによってできるものだからです。

●2 世紀にアレキサンドリアにオリゲネスという人がいました。彼の父はレオニダスといい異教徒でしたが、キリスト教に改宗しました。彼は熱烈な信仰を持ち、毎日聖書を読み、自ら子供たちに聖書を教えました。オリゲネスは幼い頃から聖書を学び、質問の雨を降らせて父親を困らせたそうです。そんな息子を父は喜び、寝ている息子の胸を開いて、聖霊が宿っている処だと言って接吻したそうです。201 年にセベルス皇帝のキリスト教迫害によって父は捕られ殉教します。オリゲネスが 17 歳の時でした。彼も殉教しようとはしますが、母親が衣服を隠したので捕らえられなかったといひます。彼は生涯、父の思い出を胸に秘め、殉教への熱望を抱き続け、父親を模範として生きました。249 年にデキウス皇帝のキリスト教迫害の時に捕らえられ、鎖につながれ、拷問され、冷たい土牢に入れられ、その後釈放されましたが、それが原因で 254 年頃に 69 歳で亡くなったそうです。

イエス様は「父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。」(ヨハネ 5 : 19) と言われました。イエス様も父なる神様を真似て生きたのです。オリゲネスも父親を真似ました。ニュッサのグレゴリオスは「キリスト教とは神的本性(三位一体)の模倣である」といひました。キリスト教とは神を真似る宗教なのです。先に歩む信仰者の信仰の姿が、後に続く信者の目に焼き付いて、後の信者がそれにまた似た生き方をするのです。こうして世々にキリストに似た者が起こってくるのです。これを実現するのが内に住む聖霊です。どうか皆さんも、キリストに似た生き方をしましょう。そうすれば後に続く信者が起こされるのです。他人が変わるのではなく、まずあなたが変わるのです。他人ではなく、まず私がキリストに従うのです。その原点を忘れないようにしましょう。